

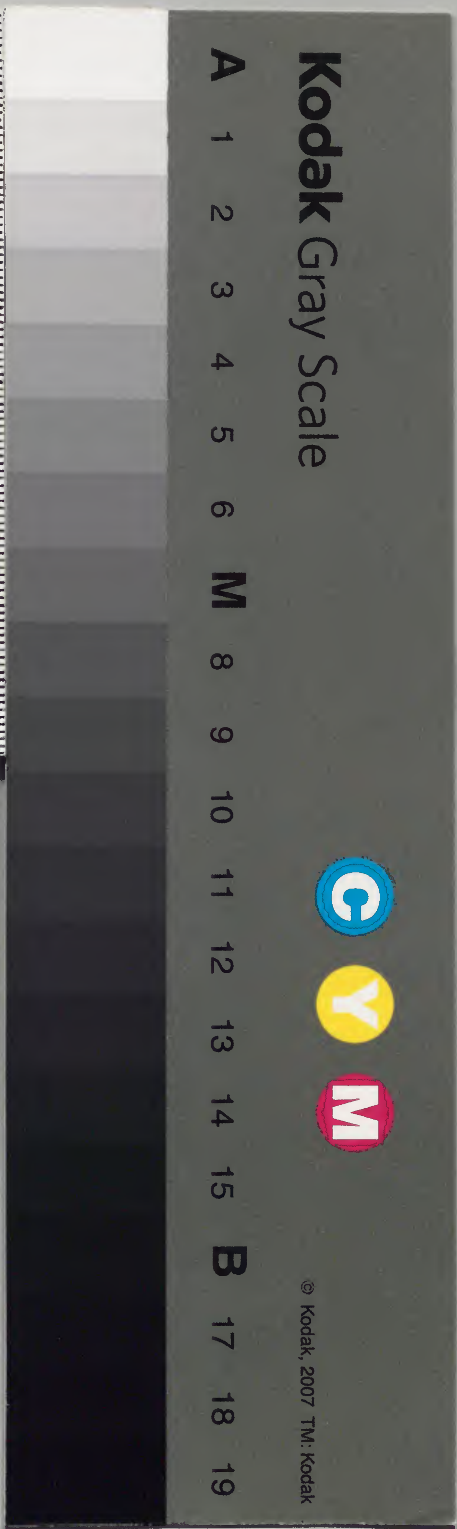
日本書紀傳 十九卷二

和書  
一〇五二二號

五十

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 ( 59 )	
函號	特	85 1

内一五六八三號





教部省  
文庫印

圖書  
文庫

南宮  
文庫

き由己上十二丁云々如くあるは此新信嘗又就ての  
御荒びも素戔嗚尊の御快くす所思食す其神の進  
給ふ御事一有るは先の御恨未聞いけさせ御在一半  
ずして終一新官を汚穢一奉一給ふ御事一至一  
給へるとある所見たりけり斯一其所一保食神實  
己死矣と有る傳十四百二十又百廿七丁辨へたる如く愈一  
傳ある事著明き者あり古事記御天降段一登由字氣  
神の御事の見えたる一上一説る如く其神の御靈形  
を天降一奉一給へるよて其大神の正身一ハ一も高  
天原一神留坐一因て御形代を降一給へるよこ一有

内一三六八三號



神武天皇御紀  
伏其共權作新宮  
と有る潛是は同一

けは若天上に御在り坐ざりむ改然る御受の御在り  
坐べきよハ非ら揃を也其上右に引ら儀式帳は天照  
太神の吾一所耳坐波甚若若と宜給へるも天上の儀の  
如く我御饗都神を迎取て其神をして日毎の大御饗  
ハ奉りしめゆと仰誨させ給へる大御命に御在り坐  
けり者ありと也此豊受大神の天上に御在り坐て天照太神に仕奉りて御在り坐す御名  
と大宮賣神と申奉り申己は大殿祭詞講義に云る  
か如し天鈿女命の示名あるハ大宮比咩神と申して  
別るり思泥○陰ハ比曾加爾と訓あり二書あり  
ふ可りず陰自送葉と有ハ上件重播種子等の事ハ見も一知も  
為つ可くして陽に物為させ給へるあるを此ハ人知

古語拾遺に當日  
神新種之節竊往  
其田に有る事  
事嘗に公言する

其南庭を其  
斎慎し清めさせ  
御在り坐けり

とす忍びに物為させ給へり一あり然るハ上此に引る  
釋の私記も新嘗之會ニハ、ア、と有て此時ハ皇祖天神等  
に相嘗を奉りて給ひ御子神等ハ更なり諸神等ハも  
其並會を賜りて給へる御事より有けは公顯ハも  
ハ得織一給ハざり故ハ陰カゲより其御席の下に至り  
て給ひて然る僻事ハ物為給へり一あり右の陰自送  
糞と有る續キに日神不知徑坐席上と有を以て其然  
る故由を曉り可くある有る海官遊行章に天孫不能  
天孫心怪其言竊覘之あると竊を然訓に神武天  
皇御紀に宣汝二人到天香山潛取其巖坐而乘旋矣二  
有る潛字あるは是ハ嘗なり名義抄陰字の訓の中に加  
直とも比曾加爾と加久流と久良志と見ゆ



△清輔奥儀抄  
 日本紀より新殿  
 と書きて此比都  
 比能美耶と訓  
 うと有ハ此の事  
 あり可一然る時

○新宮（斎庭の事）古事記（小問）看大嘗之殿（此）之有る是より身一  
 一書ハ新宮御席之下（此）之有る其御席ハ謂ゆる天津高  
 御座の御事ある由傳二十一卷（二十）云ハ一記傳ハ  
 九（此）ハ此の文を引て新宮（此）之有るハ此料ハ新ハ此大嘗  
 間食ハ坐す料ハ宮（此）之新ハ造給ふ事と見也（補）意と云  
 此たるハ實ハ然る言なり即此あるを迹波那比能宮  
 と訓来りハ即新嘗宮と云事あり云ハ大嘗宮  
 の權輿是より此訓を今棄む事余りハ可惜一ハ  
 古事記朝倉宮段大后の御歌あり三重珠ハ歌あり示  
 比那閑夜と有ハ新嘗屋（此）と云事あり此と其意異る

ざるを以て今ハ古き訓（此）ハ従ひつ（然）ハ常ハ云ハ新  
 小構造（此）ハ給ハ官室の事ハ有けきハ新（此）を給ハ料  
 訓（此）ハ言ハ一ハ其ハ此ハ其ハ珠（此）ハ右の閑看  
 大嘗之殿（此）ハ有ハ如ハ新嘗間食（此）ハ給ハ料ハ更ハ別  
 屋（此）ハ作（此）ハ給ハ事ハ有ハけきハ比美夜（此）ハ訓ハ  
 其差別無ハ如ハ己ハ引ハ用明天皇御紀ハ御新嘗於  
 磐余河上（此）ハ見えたり此時の皇大宮ハ館於磐余名曰  
 池邊雙規（此）ハ見えたり其地あるを殊更ハ其河上ハ  
 斎場（此）ハ作（此）ハ御在ハ坐ハ其所ハ幸行て間食（此）ハ給  
 へると思  
 此新宮ハ謂ゆる斎庭の事也即大嘗宮是  
 ありと云るハ己（四十）ハ引ハ中臣寿詞ハ千秋（五百）  
 秋（瑞穗）遠平（久）安（久）由庭（仁）所知食（止）事依（志）奉（豆）云  
 如此依奉（志）任（云）所聞食由庭（乃）瑞穗遠云ハ大嘗  
 會ハ斎場（仁）持斎（波）和參来（豆）云ハ有ハ引合（比）て大嘗



會儀は十月上旬各處採大嘗宮御殿料材祓豆卜部国  
司率造酒童女物夫人并夫等向卜食山祭山神略中祭畢  
造酒童女執斧伐樹夫等終之運置次各為女同殿料萱  
稻實卜部官主祓豆外部国司郡司率造酒童女物部男  
并夫等向卜食野祭野神略中祭畢造酒童女執鎌芥之夫  
等終之運置齋場之見先祭十餘日各大嘗官料雜材  
并萱運置朝堂第二殿前先祭七日鎮大嘗宮齋殿地其  
儀也神祇官中臣忌部官人依次率悠紀国司及稻實卜  
部祓宣卜部造酒童女焼灰等略中官主執祭文入南門内  
再并兩段訖讀祝詞門内再并鎮畢二国童女各執箸木

木賢木柵神殿四角并門處訖執齋歛国別四柄以布  
始掘殿四角柱塙塙別然後諸工一時起于其官  
地東西一丈四尺南北十五丈中分之東為悠紀院西  
為主基院略下見えたり如此く此大御政を所聞食す  
齋殿を正殿の外より別よ此事の之より構造を給へる  
是あり但此ハ毎世一度の大嘗祭の齋場の御事あり  
が毎年一度の新嘗祭又六月十二月兩度の月次祭より  
就て行つて給ふ神今食之共よ於中和院行と江次第  
より所見たるが如く正殿の外より別よ此事を行ふ所有  
るり然るを神今食儀より其同卜所を神今食院と註



さとたろと高橋氏文よハ神今食を神齋と作り此を  
 以て毎年の新嘗を行つて給ふ其所も同トク齋庭の  
 義ありを曉る可くあり有けり 神今食ハ凡て新嘗と  
相も異くやろ事あり  
 ろを新嘗ハ新稻を以て行いせ給ひ神今食ハ今摺の  
 未を以て改改給へる御事よして六月十二月  
 頌たて給ふ月次の幣帛ハ其為よ奉る也 給ふ申申  
 く祝詞講義註るハ如し神庭よても六月十二月  
 次祭と九月神嘗祭とを三節祭と申して其儀凡ての  
 事共朝廷の御式と異ありざらん其原づく所此と回  
 小き御事ハ 諸此ハ卷首よ己よ註るが如く四神出生  
 章第十一一書より照應テツアふ所ありよ其よ以其稻種始  
 殖于天狭田及長田其秋垂穎ハ握莫と照然甚快也と有  
 ハ此よ天照太神當新嘗時と有よ合いて即食物の始

△牡丹庭ハ茂れる  
 花の香をよ吹除  
 て給ふ保食神と  
 云歌ハ乾て云し  
 保食神ハ宅神  
 あり和名保食ハ  
 保食神と書り  
 万物よ守れる神  
 御在す葉守神  
 ハ樹神あり結神  
 ハ産生の神あり  
 云と有て

是るり次よ自此始有養蠶之道焉と云らよハ此よ天  
 照太神方織神衣居斎服殿と有て衣服の起是るり然  
 ろよ此よ新嘗の御事有ハ正一宮室の原とハ見え  
 るが上よ照す可き文ツ一も見えざらん如くありと  
 も己丁引る大殿祭詞ハ屋形久と遲命 是木  
邊也 屋形  
 豊宇氣姬命 是稻  
靈也 有て此よハ別神の如く見ゆめ  
 水ども其ニ柱と上よ撫て屋形命と有り下の詞別小  
 ハ大宮賣命と有て一神よ坐を奥儀抄と保食神宅神  
 ミ見えたとハ師の古史徴よ定らんたるが如く實よ  
 屋形神ハ保食神と同神よて衣食住の神よ坐す事著



けり其保食神の御身より官室を作る木と草と出  
来ると令採て天香山あると令殖谷へり傳の有け  
しと四神出生章より生木祖句と迺馳次生草祖草野姬  
と云傳有と却りて其を正しとて然る傳へか省と  
たりけしと然るもても覆はるる事ハ其第ニ一  
書より雅産豊神と傳りて此神頭上生蠶與桑と有  
る桑ハ蠶ハ属たる者より屋材あり非ざる保食神  
の御身より木共の多く成さるると蠶の事より因て桑木  
の名のこ出たりと云しハ強事ハ非ず機殿儀式ハ  
天八千之姫殖桑葉於天香山この見えたること此

章より天香山より五百箇直坂樹ありとも取ると  
し事の有る者とや然り此章より右の如く衣食住の  
ニ共より具りたる上ハ其より對見る可き其章より  
漏せりけし事申す迄も非る程の御事あるなり  
其上右より引る儀式より大嘗官と構奉る事を造酒童女  
の仕奉る由りありも考ふる所有り其ハ大殿祭詞  
より依り屋形命を申すも大官賣命を申すも共より保食  
神の本名ありし神名式造酒司坐神六座の中より大官  
賣神の御在り坐と證と為る時ハ此時より其保食神の  
天照太神の御為り新嘗宮を造仕奉りたりけし遺



跡の大嘗祭の儀式は有り傳はざるは不有ける古事記  
 は如屎醉而吐哉登詩曾と云ふ天御言の有は此大官  
 賣神の酒を醸て奉りけしを此は豊樂を拜神と賜人  
 る事あるも知るるめり然は手置帆負彦狹知二神  
 の正殿を構はるは此後磐戸隱の時を在て此新嘗  
 宮は保食神の奉りて給へるも有ける但眞儀抄  
 宅神ありと有るは以て例を考るは神祇令季夏月次祭  
 義解は謂於神祇宮祭與祈年祭同即如鹿人宅神祭と  
 有は唯宅を祭る神と通え又貴嶺問答は宅神を夜  
 加都神と訓るも唯は宅内の神と見え土御門院御集  
 み相木の森の下葉を折敷て夜加都神をも祭る  
 噴哉又木工頭為忠朝臣家百首は神祭を槌相其葉  
 手を折つる省の竈に備つる哉又忠見集四月家の  
 神祭る年毎は祭るし教は伎祿不見も戴く夏の白く

る迄は多も有る拾芥抄は祭宅神吉日と有るは  
 月を指さるは右の為忠百首は卯花を詠合せ忠見集  
 詞書も四月と見えたるは右の季夏月次祭の下る  
 る宅神祭と別あり少や明月記建久十年四月廿日  
 條は今夜家神祭云は件竈神日來座防門去廿七日渡  
 此宿所坤方と有るは右の為忠百首を同トく家神  
 と云て其祭る所の竈所と見えたり然は宅神祭と  
 云は一神を指して家と在る所の神を祀るは  
 保食神と指さるる取難きが如しと雖も正しく眞儀抄は  
 保食神と指さるる神の中は其然るは傳七二十八丁十己  
 註るが如く八洲起元章第一書は化依へ尋之殿  
 又化堅天柱と有るは今漸くは滄溟より碓取盧島  
 と探給ひ得たる所あるは然る御説の出来整へるは  
 ど凡て世の始は甚奇異ある御事あるは多在りけし



ハ今容易く測知り奉る<sup>所</sup>き事なくぬども此保食神  
の御在り坐す程迄ハ世々人々も云者無くして何  
れも尊き神等の御在り坐たりしハ此御時より  
以前より宮室ハ本より<sup>の</sup>事めて食物衣服凡ての事  
物器械共々思ふせハ所思ふす任に神隨に成出来  
御事ハ御在り坐けしを彼二柱御祖神の何不生天下  
之主者歟之宣<sup>ち</sup>りて生成し奉給へりし御驗の顯ハ  
以給ひし天照太神素戔鳴尊の皇太子天祖吾勝尊の  
成出給へる即伊弉諾尊ハ幽宮を構りて寂然に長隱  
給ひしより国土ハ全く顯世に成りしハ衣食住

の三共々入力を盡すハ非<sup>ハ</sup>成以て出来難く成よ  
ち<sup>ハ</sup>是を以て皇祖天神の天地を預鑿造りて給ふ靈  
威ありけりし保食神の御徳盛に成りて御在り坐て  
国上より其御靈を幸ひへ御在り坐ける程天照太神の  
其皇太子を以て顯國を所知し坐し奉給ひし大御  
心<sup>坐</sup>ハ故に其神の消息を令省給ひけるもの<sup>的</sup>して其  
物の成りしハ保食神共々其靈物共々天上より  
召上給ひて御回管り又養蠶の道をも始りて給へり  
ハ皆顯國の爲りて顯見蒼生の爲りし有けりハ此  
より御殿造の御事るども亦国土人民の爲り始給ひ定



給ふ所なりけむ右件み云る如く保食神之事議り給  
いて然る可き道共を始させ給へりけし事申すも更  
る御事ありり此時より天宮ハハ彼ハ尋殿  
て御在し坐つむを其如何ある状も如何に在  
けしむ代ハ何てり測知奉るむ然れども漢土に  
より物々代ハ元居野處と云るを皇大御国よ世の始  
同あるか或あるを況て○放尿ハ第一書ハ送糞此  
云俱蘇摩屢之見え古事記ハ其於聞者大當之殿尿  
麻理散と有り神祇本紀ハ第一書ハ同日事と其  
みの放尿送糞と續けたる當昔然る本も有らる可  
く此言の意ハ傳九八十一註ハ合せ考ふ可

然るに釋秘訓ハ分賀志須止可讀之と有て送糞と  
然訓たるハ其次ハ送糞此云俱蘇摩屢以上八字御讀  
不可讀之と有か如く御前より讀奉る事を憚らる故  
に唯ハ汚奉之言を換て申せらるるあり然るを雄略  
紀ハ汗皇女と有る行あるに於加須と訓へき所あり  
ども其言を諱て亦賀須と訓らる如く然る忌ハ  
言共ハ廣く其穢すと云ハ換て申習ハ然るが定り  
たる訓の如く成り者あり今此御紀ハ然る訓  
を物爲たりし後世に至りて何とて舊訓ハ從つ  
其と知らるるを恐て舊訓ハ從つ諸古事記訶  
志比宮殿大板ハ依て罪類を求給ふ中ハ尿戸と有ハ  
此の如き罪紀有と云る然るに古語拾遺ハ此殿尿  
戸ハ下ハ當新嘗之日以尿塗戸と有ハ古く尿戸と書

濁心若是男者則可以為有清心



来りて戸字は泥にて説を成たり者よ、甚しき誤る  
 リ尊ニ一書は於新官御席之下陰自送糞日神不知徑  
 坐席上と有が如く新官の御席の下より放給へる  
 みの有けは殿戸より更なる然る事の見えざりけり者  
 之や儀式帳大嘗祭儀大被詞共は皆尿戸と作る共は  
 戸ハ借字なり記傳三十 ナ 尿戸ハ久曾幣と訓べ  
 一上巻ハ尿麻理散と有る是あり戸ハ幣理の理と省  
 るりて即麻理散を云ふ和名抄ハ痢久曾比理乃夜万  
 比とも又放屁信比流とも有り又嚏ハクセンの比流も但言ハ  
 尿の滑るるを見理尿とも云ふ此比理と通ひて同

公兄欲詛久之時必有  
 送糞其坐若除其  
 糞者必有夏病故  
 曰神祿其師有病  
 苦是古之遺法也

言あり即今小出あるとの卵を生出て物に着け置くを  
 幣理着と云ふ是あり拾遺ハ以尿塗戸と云ひ祝詞考  
 ハ尿患ウロトモの意と為り水たり共ハ聞えぬ事あり天罪七  
 を擧たり其六ハ放又埋又時又刺又剥と其成せり態  
 の言と為水ハ此も閑理と云ふ態の言と擧こころ餘  
 の例の如くハ有也と云ふたる實ハ然る言あり又  
 此様の理ハ省く例多一日並知と申す御名を比那朱  
 志と申すハ如しと云水き邊を信とも信理とも云る  
 る共ハ私記ハ今世欲詛人者亦有放失者倣此耳と  
 見え桐壺卷ハ渡敷を渡る時ハ彼方此方云合せて衣  
 の裾堪難く物為つた甚ハシシク無瑞事多在りとの有る右の



類の事をして人を誣ふ事有<sup>の世</sup>を以て書たる文あり此  
よてハ素戔嗚尊の日神を誣い奉るとハ毎く唯御心  
の進びよ因て物爲させ給へるありめども其汚穢  
觸つて御在し坐て第三一書ハ日神舉體不平と有る  
如きハ至まり一者あり甚切可畏 後釋ハ此ハ本  
須佐之男命の  
犯し給へるハ大嘗の殿を穢し給へるハ依ての罪ハ  
此國土おして人の上ありて穢し給へるハ依ての罪ハ  
事をして穢しを罪といふる可し 又此ハ因て竊  
事と爲るとも穢しを罪といふる可し  
ハ思ふハ必此事ハ及びせ給へる其本あり有べり  
けり其ハ例の第十一書ハ保食神の御饗奉給ひけ  
る所ハ是時月夜見尊然作色曰穢矣鄙矣寧可<sup>下</sup>以口

吐之物養我宇に見えたるハ古事記ハハ其大氣都  
比賣自鼻口及尻種ニ味物取出而種ニ作具而進時速  
須佐之男命之伺其態為穢汚而奉進之有か如く其始  
鼻口尻より取出て御饗一奉らせ給ひしハ穢汚き  
物を以て進ると所思し坐けるハ天照太神を其と令  
取給ひて御田ハ作ししめ給ひて其秋の初穂の新嘗  
を所聞食すよハ齋庭ハ坐て齋し慎し御在し坐よ  
依て素戔嗚尊の爲させ給へるとハ反様あるを以て  
愈先の事を所思し出て然る御荒びハ物爲させ給へ  
り者こるむ所思えたる 若て我ハ汚しと思ふ物  
ありハ皇太神の齋ハ



爲させ給へる事の不審一々御屎ありて給へ  
るも皆彼保食神後の御返一々沈ありて奉給へり  
御事よ ○古事記よハ此ハ故雖然爲天照太御神者  
登賀未受而告如尿醉而吐散登許曾我那勢命爲如此  
又離田之河埋溝者地矣阿多良斯登許曾我那勢命爲  
如此登詔雖直猶其惡態不止而轉と見えたり其ハ此  
身ニ一書ハ雖然日神恩親之意不愠不恨皆以平心容  
焉ハ有ハ引合たり所ありて依て其傳世一八丁ハ委  
しく註す可き事ありども此ハも云ずしてハ得有ぬ  
事あり有けり其如尿醉而吐散登許曾と次あり地矣  
阿多良斯登許曾ニ有る詔直一の御事ハ自然他ハ

り詛ハとたり時ハ其詛ハと返す禁方ハ成とる者  
ところ所思えたる然るハ其惡ハき行と見又惡ハき  
言を聞たハむハ必ハも其善ハとハ本より見ゆハ  
りりける事あり其惡ハき事ハ當りて此方よりも  
其如く行いし言も爲たハむハ即争と云者ふて  
此ハ何以勝るや知べハむハと然見直ハ聞直  
さる程の事あり見直ハ聞直ハ置く時ハ其  
災多し中休ありて息べりける事あり然とむ  
此次ハ又見天照太神織ハ神衣居ハ斎服殿則剥天斑駒穿  
殿ハ而投納云ハ由此發愠乃入于天石窟ハ有か如く



事の極めて甚しく有て何方よりも見直し聞直す所  
 言に至りてハ止事と得べし〜ざ〜て發愠して給へ  
 るよて其御執も決めて甚どりつとゞ終よ日神の  
 天地の間よ二益く尊き高き大御稜威あり顯しとさ  
 て給へりけり寔よ天照大神の平和りある大御心な  
 し見奉り知し感け奉らる事云知す多在りける即是後よ  
 言忌と云事の出来始りる基ある者あり斎宮寮式  
凡忌詞内七  
 言佛称中子經称深紙塔称何良岐寺称瓦菅僧称髮  
 長尼称女髮長齋称片膳外七言死称奈保留病称夜  
 項美免称監岳血称阿世打称梅完称菌墓称壤又別忌  
 詞堂称香燃優婆塞称角苦るとハ適よ後の事よて有  
 儀あり事を知べし又御紀よ月蝕と有も其及語ありて

註と祭の意よ云成し又ハ台記別記あると平始よ病  
煩し事有と歡樂すと有るると皆詔直の例あり  
 記傳ハ十よ如尿醉而吐散と詔ふ意ハ尿の如く見  
 ゆ〜ハ尿よハ非ず酒よ醉て吐散しつる者不とあり  
 此ハ尿ある事ハ所知着る〜尿よ非ぬ状よ詔し成  
 せんあり抑醉て吐ハ已事と得ず處をも擇い敢ぬ事  
 有り又尿よりハ穢も淺き故よ如此詔直し給ふハ御  
 恩愛の深き〜と云とたるハ右よ引る第一一書  
 の意を合〜と云とたる説よて實ハ然る言ハ有也  
 ども然の〜ハ非ず此ハ其大嘗と齋庭よ聞食させ  
 給ふ御時の事よ一有けとハ萬よ斎清めさせ給ふ上



めも猶慎一御在一坐す所ある一然る禍一し  
 車の有るし事の不祥きを所思看て給ひて  
 詔直させ給へるる大殿祭詞別に神等能伊須呂許  
 比阿禮比生言直和志生皇御孫命朝乃御膳夕  
 乃御膳供奉比禮應伴緒伴乃御膳夕  
 氏こ有る大御饗に就たる事あるに神等の進こ  
 い荒い坐と詔直一坐乃御膳足躓あどの不祥き事毎る可く  
 祈申すもて其始此の故事あど依て出来らるを詞を  
 小し事祝詞講義に説らるを合せて考ふ可き者あるり  
 一又此直と云言の義へ傳十三百四十三百五ふとし

△得行

己に註りて踐祚大嘗祭式に凡散齋一月致齋三日日に  
 事如舊不得事喪問病食亦不刑殺不決罰罪人不  
 作音樂不禱穢惡之事致奇唯祭事自餘志漸と有る後  
 の事あるを傳へて醉と云例の神武天皇御  
 物忌の嚴重あるを見る可し醉と云例の神武天皇御  
 紀に吾今當以嚴竟沈干丹生之川如魚無大小悉醉而  
 流譬猶被葉之浮流者略乃沈竟於川其口向下頃魚皆  
 隨水喰喝と見えたり其嚴竟の神酒に醉たるる  
 仲哀天皇二年御紀に到停田門食於海上時海鯽魚多  
 聚舟傍皇后以酒灑鯽魚即醉而浮之と有小合せて知  
 べし又古事記明宮段小於是天皇宇羅宜是所獻之大  
 御酒而御歌日須二許理賀迦美斯美岐迹和禮惠比迹

○日本書紀傳十九

○六十八



六三行は焼刀之如度  
折敷大夫之御豊  
街酒之吾所の家  
里る

祁理許登那具志惠具志尔和禮惠比迺祁理如此歌幸  
行時以御杖打大坂道中之大石者其石走避故諺曰堅  
石避醉人也こ見えたる此は宇羅直こ有ハ情舉と云  
事よこ大御酒を聞食て御心の浮水させ給へるを申  
すあり上あり魚の事よ浮と有ハ皆其吞醉て浮るこ  
貞を云ツ万葉三丁三十三酒飲而醉哭為師益有良之又  
醉哭為尔可有良師又飲酒而醉泣為尔尚不如素有  
る也 醉と云ハ酒よ飲浮るこを云者あり然也ハ云  
と云よ近り可一但此ハ此醉の事を云之一云云  
ハ得有ぬ故あり其委一其義ハ宝劍出現章飲醉而云  
ここ有る下よ云一傳二十三卷 十 丁見り可一

上四丁十引る大嘗祭辰日儀よ己一刻供御膳次賜五  
位以上饗と有て其日ハ悠紀節會あり己日ハ主基節  
會あり午日ハ豊明節會あり酒饗を賜ふ事あり其  
宣命よ今日波大嘗乃直會乃豊樂聞食日尔在故是以  
黑岐白岐乃御酒赤丹乃總尔食惠良岐罷止為氏奈常  
毛賜御物賜止宣と有り又新嘗會儀あり今日波新嘗  
乃直相乃豊樂聞食日尔在故是以黑岐白岐乃御酒赤  
丹乃總食惠良岐退止奈云こ見えたる赤丹乃總ハ  
酒を飲て顔色の榮えて赤くあるを云て豊明の明ハ  
同トく食ハ續紀第三十八詔よ多末倍と云り即今も



俗に多信流と云ふ是あり恵良岐ハ此ハ噫樂と有と  
 口訣ハ筈遊也と有ガ如シ如比ク後の大嘗會新嘗會  
 共ニ天皇の聞食させ給ふに就ニ皇太子より始奉リ御臣酒饗を賜ハ御事  
 の御在ニ坐ハ例の天上の風儀ハ倣ハセ御在ニ坐ス  
 大御政あり事申すも更あり御事あり此ニ就テ思フ  
 右ニ引ル醉而吐散と云ふ大御言ハ尋常の時ニ宣  
 ひ出させ給ふより如何ハも現ハ飲醉給へる御有  
 状を見行ニ給ハスハ然ル大御言の御在ニ坐ス  
 を思フハ決ク此ハ皇太神の新嘗聞食すと共ニ奉茂  
 鳴尊亦も諸神と共に眞席も三列リ御在ニ坐テ然ル徒事ハ物為サ

セ給へるあり古事記ハ右の大御言の傳ハ此ハ  
改ハ後の大嘗新嘗ハ正しく合ハ事  
の有と唯ハ新嘗と聞食させ給ハ御事との見ハ  
甚鹿漏キ事あり予ハ此醉の一言を捉へて如此ハ思  
得るも先ハ中臣寿詞講義と然ルハ先天孫降臨章第  
 著述ハ一ツルハ依ルあり  
 三一書ハ神吾田鹿葦津姫以下定田號曰校名田以其  
 田稻曠天甜酒嘗之又用淳原田稻為飯嘗之と有テ酒  
 と飯とを相並べて新嘗為させ給へるあり中臣寿詞  
 小も悠紀主基乃黒木白木乃大御酒遠大倭根子天皇  
 我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止仁實仁赤丹乃穗  
毛所聞食豆豐明毛明御坐豆と有も酒を先ハ一  
 飯を後ハ云るあり酒を第一と為る事あり故あり



故大嘗祭儀齋郡の所より下定物部人等十五人男六人 女九人  
 造酒童女一人以當郡大少領女未嫁 食克之神語佐可都古 稻實公一人大  
 酒波一人多米酒波一人粉走二人相作四人焼灰一人  
 採薪四人と有て造酒童女の方稻實公の上より又  
 其下定田の板穂の事も造酒童女先之稻實公次之酒  
 波次之物部男女次之と見えて其餘の事共多かり皆  
 造酒童女一人を以て專要と仕奉りし事酒を先こし  
 飯と次と爲る事ありが故あり由予己の中臣壽講詞義  
 よ己と説置る如くありと其大嘗の大御政の始り有  
 る此御時と起さるるなりすば何水の御時と指て始り

公具八皇字沙次文  
 上載る三月晦夜燈  
 油供奉御會神祝詞  
 高天原事始瑞  
 布天都御膳方皇木  
 木大神河長御膳  
 遠御膳上御酒兒  
 大氣造豐宇賀能賣  
 命宇賀能賣命保  
 食神宇比御神初者  
 癸腹滿進云云  
 有る御造酒兒童女  
 謂ゆる酒造童女  
 の始る大氣造の  
 大御膳造の内なる  
 思合す可事  
 なり又

思ふ上四十九ありも云る如く此時の新嘗ハ一と豊  
 受大神の萬より取擬ありて鷹の奉るを給ふ御事あり  
 有けきハ天上よても酒を醸する事の始り其大神より  
 ろむ御在り坐ける丹後風土記に此豊宇賀能賣命の  
 御事を記せり爰天女喜爲釀酒飲一盃吉万病除之  
 と云事の見え又神名式の同国丹波郡天宮賣神社二  
 座大神を社傳に豊宇氣毘賣神を二座より祭りし由云  
 るハ大政祭詞に此神を屋船命と申せらるを詞別ハハ  
 大宮賣命と有り合ひ又式に造酒司坐神六座と有る  
 中より大宮賣命四座と見えたりと造酒司式に考合す



竈神四座と一神の一次の三座ハ其下ハ五位上大  
 邑カ自徒五位下小邑カ自次邑カ自之見えたる其神  
 子御在坐あるハ文徳天皇實録ハ齋衡三年九月辛  
 亥造河内酒甕神徒五位下大邑カ自小邑カ自等並預  
 奉授造河内司徒五位下大戸自神徒五位上之有ねハ其  
 神体ハ御竈と酒甕とを以て奈々セ給へるとも思合  
 可き者あり續古事談ハ造河内の大カ自ニ  
 云ハ三十九入るハ土ノ深ク  
 堀入て僅ニ二尺許出たり云ハ三條院ノ御時ハ彼司  
 臥たりケルハ大カ自カ自カ自皆打破てけり  
 云ハ倭姫命也記ハ河内殿神豐宇賀能賣命徒坐ニ有  
 石ニ同ト御靈形子御在坐とも思合す可ハ此河  
 大風吹て

兵車上下百字ニ下  
 云るとも考へず  
 可

而殿神ハ造河内坐神ト同トテ齋なり○神衣ハ加牟美曾と訓て天照太  
 神ノ服御一給ハ御衣と申す義あり第一一書ハ神  
 之御服も出たりハ此意あり者あり右ハ新嘗ノ御事  
 ノ御在坐す其ハ並ひて織神衣と有ハ踐祚大嘗祭  
 式ノ織神服と所見たり子同トけとハ其起原此ハ出  
 たり御事申すも更あり神祇令義解ハ季夏神衣祭謂與孟  
 夏祭同  
 神嘗祭謂神衣祭日  
 便即祭之と所見て神官ノ神嘗祭ハ神衣  
 祭有も其始一事あり有を崇神天皇御せり神廷朝  
 廷相分とてセ給へるハ依て人皆其始異なりと思ふ  
 事ハ有ねども其本此ハ在て古ハ同トりつる者



ありけり傳十四 百五十 六丁 引る機殿儀式張小舊記云  
皇太神御座<sup>高天原</sup>之昔人面等之遠祖天八千<sup>天</sup>姫殖菜葉於  
天香山<sup>天香山</sup>之蠶之御糸織供進御衣於太神之見元なるハ  
四神出生章第十一一書よ自此始有養蠶之道焉と有  
る所よ係りて此よ織神衣云よ相當なる文なる事  
論と待ずるむ有けり又神宮雜例集に載る少神部神  
服連之後正大神部神服連之道尚等か嘉應二年辭狀  
よ於神御衣勤者掛畏天照坐皇太神御坐天原之時以  
神服部等遠祖天御杵命爲司以八千<sup>天</sup>姫爲織女奉織  
と有る此所の儀と委しく云々なり平田翁の古史成

文よ此を日神の石屋隱の所よ序くをたごども  
其時ハ此よ己小始りて養蠶經織の道有て後の事よ  
し有けり殖菜葉於天香山と云時ハ同ト事の相復  
さるよ成と如何ありけり爲む其ハ古語拾遺天石窟殿  
よ令天棚機姫神織神衣所謂和衣 古語云 伎多信 こと有と一車  
よ思はさたりあり可けりごども其時の事ハ此よ日神  
の斎服殿よ於て初て物爲りの俗へるを生剥逆剥の  
御荒び小依て事の息たるを再興して御心を取奉る  
るありま同ト神よして同ト事を仕奉りしあり有る  
ども其前後の相違有る事あり有ける 凡て天石窟の件よ



六百三十一と云事  
なり

頭と幽と二方より係て心得べき事共有り其頭と云ハ  
誰も知水如く素茅鳴尊の御荒じ日神の天  
石竈より幽居り御在り坐す其御怒を解奉る爲に  
大御幣を取捧げて八百萬神共々懇到に祈禱さした  
る是より幽と云ハ日神の此時の御政ハ衣食往の事  
を事も事始の定給ひて顯見蒼生に御恩頼を令蒙給  
はしとの御業あり然る素茅鳴尊の恙は損傷  
せ給へるに依て日神の御怒甚しく御在り坐て天石  
竈より幽居りて御坐し坐る思兼神の深く遠く思量  
給へる所此に在て其申休まりて鳥止ぬる衣食往の  
道を始より殊更に善成して仕奉らるが故に御心  
の平和にて磐戸を出させ給へるよて是即幽る事  
下よ委しく云を見て知べし然るに右の神衣の如き  
も此に在て再其石竈の時を在る事由縁有る事あり  
と人の得知神衣と云義ハ神祇令孟夏神衣祭義解よ  
ずる有ける  
謂伊弉神官祭也此神服部等齋戒潔清以參河赤引神  
調系織作神衣略中以供神明故曰神衣に見えたりハ大

嘗祭式の神服も同じく神に供御る義を以て云るよ  
て神嘗祭神今食あるの神此も同一然るも皇太神の  
此御時あり新嘗聞食すよ就て御服を令奉給へる  
あるにハ此神字ハ例の神集神議あるの神此も同一然  
るも第一書に令織神之御衣ハ皇太神より奉るに  
給ふ可き神の御在り坐て其神の御料を令織給へる  
も富水がら入此事の例に依て神衣大嘗等の祭事の  
有も皆天照太神に神衣神服を奉るに給ふ御事より  
有けよハ此御時よ何水の神の御衣とて殊更に令織  
給へる此御政よ就てハ相嘗の皇祖天神よ本より奉



くせ給ふ可き御事ハ申すし更なほと此ハ新嘗聞  
食させ給ふ皇太神を主と爲る所子一有けしハ神之  
御服ハ非ず古事記ハ神御衣ニ引續たる如く  
日神の御料の御衣ありし唯崇<sup>ま</sup>へし神の言を冠<sup>ふ</sup>  
くせたる者ありし有ける諸神衣祭大嘗祭共此の  
和妙子相並べて荒妙をも奉る事ハ有はと古語拾  
遺天石蜜段ハ麻と藁木との事を云て以上二物一夜  
蓄茂也と有か如く其時に至りて成初たる多は此  
よりハ和妙のよりハ訣ハ神衣者神服云<sup>明妙</sup>照妙云  
る是る<sup>但此の神衣ハ和妙ありと云ハ此ハ限りた  
る説めて凡て神衣ハ荒妙ハ在は和衣ハ</sup>

在れ神ハ奉る服御を惣て云稱あり太神官式神衣祭  
條ハ石和妙衣者服部氏荒妙衣者麻績氏各自潔斎始  
後祭月朔日織造至十四日供祭に見え自家部類ハ載  
たる主上大嘗會降神祝文ハ是禮朕我奉留神衣子羽  
槌雄所織留文布棚機姫乃所織留和衣能神衣登云  
奉獻留青筋乃文布乃荒妙乃神服白給縹布乃和妙乃  
神衣ニ有か如く神子奉る御衣を凡て神衣と云事を  
知べし<sup>一</sup>宿美曾云言の義ハ傳十卷二百二十八丁ハ  
云り<sup>○</sup>織ハ意理都都と訓り此子ハ天照太神の御  
自織給ふと云事ハ他傳の状ハ異なり先第一二  
書ハ<sup>一</sup>稚日女尊坐于斎服殿而織神之御服也と見え  
古事記ハ天照太神坐忌服屋而令織神御衣之時  
穿其服屋之頂逆剥天斑馬剥而所墮入時天衣織女見  
驚而云ここ見えたと天照太神の御自織せ給へ



るありす衣織女は在りて令織給へる者あり其上下  
 よ引る機殿儀式帳小天八千姫殖素葉於天香山以  
 所蠶之御糸織供進御衣於太神と見えたり一始て養  
 蠶の事は仕奉りしより此は神衣を織て仕奉りし至  
 る迄皆其神の仕奉りしありけり神祇本紀に織女  
 稚日女尊と有る右の天衣織女と一合せて情進は  
 物為るもの有べけりども其實は同神は御在り坐る  
 状あり猪古事記の傳よて天衣織女を令織給  
 へる其忌服屋は皇太神も入居御在り坐て其態も看  
 行り御在り坐る趣あるは實は事實も合いて甚愛た

此有と序二書  
 日神居機殿と有  
 織女と云ふ事

く有るは此のこゝ此は天照太神の御自織給へる傳  
 誤ある可き事申すも更なる但其は天衣織女見驚  
而於核衝上而死  
 有るは此第一書は推日女尊乃驚而墮機以所持梭傷  
 体而神退矣と有る同傳あるが共は身亡給へる状  
 小文を成せる誤あり此より後石窟隱の時仕  
 奉給へる古語拾遺の天棚機姫神を申すも其同神は  
 御在り生を如何もてり焉む然るが驚て退出給ふよ  
 こゝに有べりけり委しく傳二十卷に註せらるる  
 見て知 其神衣を織る状は右に引る神官雜例集に載  
 せし辭状は神部等遠祖天御杵命為司以八千姫  
 為織女奉織と有る此度よも次の磐戸隱の時よも右  
 の如くして仕奉りしありけり姓氏録大和国神  
別天神  
 服部連天御中主命十一世孫天御杵命之後也と有り



太神官式四月九月神衣祭條より右和妙衣者服部氏略中  
 各自潔斎始祭月一日織造至十四日供祭其儀太神  
 官司祓豆内人等寧服織女八人並著明衣各執玉串陣  
 列御衣之後入略下と有る服部氏ハ司る織女ハ其部  
 めて天上の風儀の如く仕奉るるあり又大嘗會式小  
 凡織神服者九月上旬神祇官差神服社神主一人給驛  
 鈴一口遣参河国召集神戸下定織神服長二人織女六  
 人工子二人訖寧長以下十人將當国神服部所朝調絲  
 十紬歸向京斎場先祭織屋然後始織下と有る此よて  
 も神服社神主ハ司る其長以下十人ハ部るるを知

今其天衣織女神祇  
 本紀に織女推日女尊  
 三有具の和名を  
 織女和名太奈八太直  
 女見え万葉集七  
 の歌に其訓を以て用  
 いたる事とて  
 天衣織女を天衣の  
 時の天棚機姫神  
 御在坐と思ふ  
 としたるなり

べくあり有ける然るに此より所りて其天宮よての  
 御事を申さむよ天照太神ハ其神衣を被奉り神給ふ坐  
 一 天御杵命ハ其斎服殿の長坐一  
 天八千姫命ハ謂ゆる栲幡千姫命の御事よて又  
 ハ天棚機姫神とも申又三女神とも天棚機姫神と稱へて共天衣織女御在坐事  
 傳二十十論め云と見て知べきあり然るを古史  
 段ハ太御神の自物為給へる書記の傳を採て天衣織  
 女云と有る古事記の傳を採ざる由ハ天上の御衣  
 織る女ハ必栲幡千姫命あり可き事古史傳ハ註る  
 如くあるに死給ふ可き由云云と云とたるハ委  
 たりざる説あり楮又神服達ハ子曠之連日命より出  
 たり一終も有て其あり云べき事も有らば此ハ然  
 一も用無き事あり云ず織の例ハ神祇本記保食神  
 傳十八卷三十六丁ハ云り



又行未偏安等織  
機上字與御用機  
上栲島浪間從所  
見

段より自此而始有養蠶之道乃起織之業者也此見元  
天孫降臨章第六一書より其於秀起浪穗之上起八尋殿  
而于五玲瓏織紐之少女者是誰之子女耶と有るをハ  
氏より服部と云ふ言の本より常陸風土記より中臣幡織  
田大夫と作るを以ても其約より事知べし神名式より  
筑前国宗像郡織幡神社一座右神と有るを其を倒反し  
云う神名あり万葉七九子藿帝誰將織經緯每二又二  
七旋頭歌より君為于力勞織在衣服斜又三十子名人雖  
云織次我二十物白麻衣八三十子經毛每緯毛不定未  
通女等之織黄葉尔霜莫零二十子為我登織女之其

八尋殿の織殿  
大嘗宮の神服殿と  
織屋とよ同し  
又此の斎服殿と

屋戸尔織白布織豆氣鴨又君不相久時織服白栲衣垢  
附麻五尔又二十子棚織之五百機立而織布之秋去衣孰  
取見又三十子古織義之八多乎此暮衣縫而君待吾乎又  
足玉母于珠毛由良尔織旗于公之御衣尔織將堪可聞  
十六八子小打栲者徑而織布日暴之朝于作尾るを所見  
たし意流ハ降る可し徑より絲を打延へ置て緯より梭  
と以て糸を通し上より織を降して堅むる者不  
さかあり名義抄より織字より意流とも久年とも云訓  
有る久年ハ其織を下し固る詔あると思ふ可し  
斎服殿ハ第一書より見ゆ古事記ハ忌服屋と有  
り倭姫命世記より八尋機殿と有て其同ト殿の事と八尋之機屋と云ふ  
か如し太神宮式神衣祭條より服部等造二時神衣機殿



其服部と神官雜  
例集と神服部と  
有以神服部と  
も云い又其麻績  
氏と姓氏録と神  
麻績連と云い神  
麻績織殿とも本  
り云ひ云ひの事

△下三百五十五丁引る  
常陸風土記と神調  
の御織りつと造  
織殿初織りつと  
有

又麻績等織殿の名見え又踐祚大嘗祭式も凡織神服  
者略歸向京齋場先祭織屋然後始織略中其神服殿者兩  
国各一字神服男女惣屋各一字祝部惣屋一字長廣、並  
以黒木及草搗菅と見たる先織屋と云るハ次の神  
服殿の事めて此の謂ゆる齋服殿是る然水ハ大嘗  
官齋場ありとも齋服殿と云べきハ神服殿と云申ハ如何  
不ともハ儀式も式も共ハ大嘗祭ハ神子上るを神  
服と云い其祭の預る人の着るを齋服と云ふ文法を  
るハ故らう古語拾遺ハ此の齋服殿の事と織室と  
ハ今ハ朝廷もてハ織殿と申ハ地下もてハ織屋と云  
ひ越後国ありとも高貴の御服を織る所を御織屋と

号けて深く忌慎し齋ハ右の新嘗聞食させ給ふ新  
めらハ此名残をせり  
宮ハ一ハ中臣寿詞と謂ゆる齋場あり由上五十五丁云  
るハ如ハ其齋場ハ對ハたる祢あり右引る大嘗祭  
式ハ歸向京齋場先祭織屋と有て齋場ハ神服殿とも  
並ハ對ハたる是るハ神祇令孟夏神衣祭義解と謂伊  
勢神官祭也此神服部等齋戒潔清云々有る其を釋  
ハ齋戒浄清き見え太神官式も各自潔齋始徒祭月  
一日織造と有ハ如ク神衣を織奉る御屋あり故ハ常  
ハ潔清むる事ハ更るハ其仕奉る程ハ萬ハ齋戒して  
深く慎し事あり故ハ齋ハ云あり大嘗祭式齋



車條より凡散齋一月十一月自致齋三日自其齋月者  
預告諸司及下符不得預佛齋清食其言語者死称  
直病称息哭称監虫打称極血称汗完称菌墓称壤之有  
ハ其齋戒の状ある中ニ死称直病称息あるの如きは  
上六十より引る古事記ある日神の御言ニ如屎醉而吐  
散齋許曾又羅田之阿埋溝者地矣阿多良斯登許曾と  
詔直一給へる是始めて忌詞の起る如此くして物  
事の悪しきを避け善き事に進むと齋戒と云て即此  
齋服殿の齋イの言是あり記傳七卷上忌服屋ハ伊美波  
衣と織屋あり故ニ萬を齋ハ慎一ニ故あり齋谷齋  
鈕齋柱ありとも同ト云云

服殿ハ右より引る太神宮式ニ機殿と有り同ト古語拾  
遺天石窟殿今天棚機姫神織神衣と有り推日女尊  
と同ト機を織給ふ由の御名あり万葉七夕歌ニ  
多く織女を詠み和名抄ニ織女と太奈八多豆女と有  
り天棚機姫神と申す神名を取て物寫るなり和名抄  
織機具ニ機織設經緯以機成織布也楊氏漢語抄云高  
機多加と見えたる是なり仁徳天皇四十年御紀ニ天  
皇親臨雌鳥皇女之殿時皇女織ハナサレ織女人等歌之曰比佐  
箇多能阿梅箇儺麼多云と有る古事記ハ於是女  
鳥王坐機而織服尔天皇歌曰賣却理能和賀意富岐美



以古の引く万葉の歌に  
織文布三千物有織  
冠し我織物と云事  
又桐機之五百機  
三つ又古織義之八  
多子又足玉母手珠毛  
由百生織物と云事  
有り

以上三物一夜讀書  
也

能於呂須波多他賀多泥呂迦世と有り此歌女鳥之吾  
王之為織機誰之種呂哉と云事よて於呂須ハ為織る  
り。猪機を波多と云ハ服手よて服を織る手伎を成す  
謂る。古語拾遺石窟段よ令長白羽神伊勢国麻績祖  
今俗衣服謂之  
白羽此種麻以為青和幣古語尔  
伎也今天日鷲神造木綿津  
昨見神穀木種殖之以作自和幣是木  
綿也今天羽槌雄神  
倭文遠織文布之見えたる衣服謂之白羽之見えたる  
祖也  
白素きところ白羽と云けり並てハ羽と云けり一以  
る。天日鷲神も駿河凡土記ハ天羽鷲亦云天日鷲天  
羽車と云車有とハ其も羽走よて其事羽の  
超り功一と

ハ二難と天台觀神  
の造る本幣と以津  
昨見神穀木種殖  
之ニ有て此ハ其と種  
るのこの神を以て  
羽神と云り如し

給へ由の神名あり津昨見神ハ古史徵第四十ハ長白  
羽神の亦名ありしハ説ハ有とバ今云ふ限ハ非ず次  
の天羽槌雄神も羽津持男の義ありと合せて羽ハ衣  
服を云祿あるを知べ一應神天皇三十七年御紀吳子  
縫工女を求よ副て遣ハさど一久禮波久禮志と云入  
名も吳羽ウハシ知あり可く即其国より召給へる工女共  
ハ攝津国豊島郡吳服里ウハハサトに住る由其吳織社ウハハの縁起よ  
見え又雄略天皇十四年御紀ハ吳より織女共を獻よ  
るよ泊於住吉津と有ハ住吉古末社記ハ吳羽神社是  
る。山城風土記ハ天羽衣天羽裳見えたと云も江次



第大嘗祭條は天羽衣に有ハ主上の御浴衣の事あり  
 ハ鳥羽多を以造らるる非るる光絹を世子羽  
 ニ重云ふ是あり諸波多の多を予あり云ハ右の  
 雄略天皇御紀ハ其所献<sup>テ</sup>予末才伎漢織<sup>ハ</sup>呉織<sup>ハ</sup>と見え  
 たり是<sup>是</sup>めて彼崇神天皇十二年御紀ハ女之<sup>ナメス</sup>予末調と  
 有ハ女の予伎ありて成るる絹綿布帛るとの貢奉る  
 意味一あり者あり  

 工人を氏毘登と云も右ノ同ト  
 通證も新井君美ハ東雅の説  
 と引て彼多羽予也羽謂衣也予謂織也云云とも羽  
 ハ衣服あり事を知てり知ざる例の推量ありめ  
 然る言あり諸又拾遺ハ秦氏の蠶織の調を貢る所  
 予貢絹綿軟<sup>軟</sup>於肌膚故訓秦字謂之波陀<sup>陀</sup>有ハ下を  
 濁るありとも同ト織の意ハ非るみや軟<sup>軟</sup>於肌膚  
 と云る余りハ浅く聞ゆ又至て昇<sup>昇</sup>き宦人の公服を

今有リ予<sup>予</sup>之<sup>之</sup>書<sup>書</sup>ハ  
 生剥斑馬<sup>生剥斑馬</sup>

白張と云ハ又下賤の者の衣服の上ノ著る單衣を  
 張と云事ハ有ハ羽ハ張の畧ありとも有る可き
   
 ○剥天斑駒の剥<sup>剥</sup>ハ佐加波岐<sup>佐加波岐</sup>ハ波岐氏と訓り身一  
 書ハ逆剥斑駒<sup>逆剥斑駒</sup>三見え古事記ハ逆剥天斑馬剥<sup>剥</sup>而<sup>而</sup>有  
 リ神祇本紀ハ天斑駒生剥逆剥と有ハ其第一第二の  
 一書共と合せて文を成せる者あり古語拾遺ハ此  
 の事と生剥逆剥<sup>生剥逆剥</sup>ニ有と始として大後詞皇太神宮儀  
 式帳世記又大嘗祭儀<sup>大嘗祭儀</sup>ハ然見え古事記訶志比官段  
 にも生剥逆剥<sup>生剥逆剥</sup>ニ出たりも共ハ此の天糞と云る備<sup>備</sup>  
 古語拾遺ハ當織室之時逆剥生駒<sup>逆剥生駒</sup>以投室<sup>以投室</sup>内<sup>内</sup>見えたり  
 如く生たり駒の皮を逆剥<sup>逆剥</sup>剥<sup>剥</sup>て活せて放遣<sup>放遣</sup>る時



ハ物狂りマモノクラガく成てナリ荒アハレ進シノブぶ者多し故ナリ然シカ爲ナリ捨ナリへる  
まて生剥ナリ剥ナリとシテ言ハの累ツキ何ノとも別事ナリハ非ナリ多シなり  
此を以て此に剥字をハ第一一書と同しく逆剥と訓  
えたるハ第二一書ハ言を換て生剥とハ有るナリ祝  
考ハ生剥トハ生ルあり其皮を剥キと云ふ逆剥トハ一事  
ありと文の勢ハ重ナリなり生剥の逆剥トハ心得ハ疑  
非ナリト云ハたハ生剥ハ伊祁波岐と訓ハ大後詞  
實ハ然ル言ハなり  
後釋ハ伊祁波岐と云ハ今ニ置キて剥ク意ナリ伊祁ハ  
伊加勢ノ約リたりあるハなり云ハたハ如ク皮  
を全剥キ剥キあり活セ置ク事ハあり馬ハ更ニ  
も云ハ又テの獸ハども子負ト成ル時ハ甚ク噴メて

荒巡ル者多し事人の知ルるか如シ一伊祁波岐と云事  
の有ハ就テ古今著聞集十六子粟田大納言忠良古キ  
大納言マテ在リありハ甚モ出仕ハあるハ爲シ憑リ御在  
一ハ頃公家ハ大納言の御用有ケ聞エけル定  
めて剥キ給ヒあハいと世ハ云ハけル其儀ハ言リけルハ  
縣召除目の且普賢寺入道殿彼卿ハ許ハ遣ハさシけ  
る入ルも彼遺物ハ見ユ哉此伊祁波岐ハ爲シさシ  
ざシけル返シ一伊祁波岐ハ爲シさシむハ理リ骨  
こ皮ハその疲ヒ附ツキ様ナリハ此大納言ハ疲ヒ細ナリりたる入マて  
御在一けルハ如此返シ參セさシけルさシ有シ皮



後醍醐天皇御記  
乃木兼光  
彼亦守氣能伎良  
也給有る生  
伊和と訓るるぞ  
例れ

を剥て生せ置くと伊和波岐と云を取らぬたふる  
 猶古事記に見えたら稲羽之素菟が皮を剥けるが  
 生て苦し居たふると此の生剥て云状も異なる  
 此生剥を身二一書あり伊和波岐と訓て古語拾遺の  
 古本あり伊和波岐に訓附たり伊和波岐と何れ可  
 りとも考るる指伊和波岐の方や勝りたりあり後釋  
 生剥を世に伊和波岐に訓し其も悪くも非ねど指伊  
 和波岐に訓し不勝りたり可き云に逆剥ハ尻の方  
 云ルたきども多きも従ふ可りり  
 逆剥ハ尻の方  
 り逆も皮を捲り上げて全剥の如く上方より全く  
 剥取て殺すよハ非ず活せ置るる雄略天皇五年御紀  
 頃猪の暴出たり時の詔も猛獸<sup>獣</sup>逢人則止宜逆射而且  
 刺も有る後の方より逆も射且逆も刺を云るる又伊

取物語に逆髪を取て擽ぐり落さむ逆尻を搔出て評  
 在の公人よ亦て耻見せむも腹立ち居りて有る田中  
 大秀ヶ解に逆髪ハ鈴木朗説に髪<sup>髪</sup>の結ぬたら本を予  
 の大指の方にて逆握るを云い逆尻ハ裳の裾を上  
 の方へ搔揚て尻を顕すと云ふ大板詞の生剥逆剥て  
 本着て強く強く云意ありと云らへ然る言あり此逆  
 尻を搔出と云て逆剥の逆々同トく共下方より上  
 下事と及ぶすと云るる右の古語拾遺に逆剥生駒に  
 有る悉く剥竟るの状あり所見たりける  
 荒木田守訓  
 神主の大板  
 詞新解に逆剥の逆ハ物の有べきが如く非ずあり  
 水沫逆巻く又川水海沙あどの巻里に推上るを逆



上と云ふ等しき逆りて生るる剥を爲す事  
 は寫る由て逆剥と云へしと云々ハホしき説る  
 たり剥ハ第一一書ハ全剥此云宇都播伎と見え古事  
 記素戔戔即伏最端和逆捕我悉剥我衣服又少名毘  
 古那神段ハ内剥鵝皮剥爲衣服あど有も共ハ波具と  
 訓へき所あり剥字の音と思ふ可うくず大方ハ擗と  
 云ハ同ト又元山あどの元ハ共ハ類語めて波具ハ羽  
 擗の意もて羽ハ物の皮を云事右ハトト云ら服の事  
 考合す可ハ延喜式あどハ獸皮の事を何張と云ら  
 ハ衣服を羽と云ハ張ハ云ハ如く皮をも同トク羽  
 張とも云るけり  
剥字ハ邦角切りて波久の音也  
 其音義共ト同トキハ音ハ

事ハ如く傳<sub>五卷</sub>望<sub>土</sub>煮<sub>尊</sub>似<sub>土</sub>煮<sub>尊</sub>の下ト云ら  
 如く斯ハ例常ハ在<sub>地</sub>又ハ士又ハ  
ハコト也ハ訓等  
ハコト也  
 多<sub>在</sub>事あり  
 ○殿ハ美<sub>阿良加</sub>訓<sub>第一書</sub>殿  
 内第二一書ハ殿内ト有も然りと雖も此ハ古事記ハ  
 天照太御神坐忌服屋而令織神御衣之時穿其服屋之  
 頂ト有も服屋ト當る所ト天照太神の正殿を申す  
 ありず斎服殿の事ト其を見行ハハ幸坐る所  
 あり  
ト云御在所ト云難<sub>ワケ</sub>リ  
 万<sub>葉十六</sub>ハ海神  
 之殿蓋丹ト云句の有も其ハ依て登能能伊良加ト云  
 い訓べりけり所あり其ハ海宮遊行章第三一書ト  
 昔不合尊の御事ト以彼海濱產屋全用鸕鷀羽爲<sub>草蓆</sub>  
昔



公の釋秘訓に此の殿と美阿良加止可讀之古語に思言至能之有るは見え古人も定の難なり

之而薨未合時兒即生焉故因以名焉第七一書よし即  
以鷓鴣之羽書寫產殿屋薨未及合中不待薨合徑入居  
焉と有る古事記よし以鷓鴣羽寫草草造產殿於是其產  
殿未薨合不恐御腹之急故入坐產殿之見えたる此二  
を合せ見るよし屋薨ヤノイカとし殿薨トクイカとも云べき状ありを和  
心し阿良加と云ふ大殿祭詞瑞之御殿の下よし古語云  
河良可カの註し古語拾遺よし古語正殿謂之麋香カ  
有が如く其在所として常カ住ハセ給ふ正殿と云ふ  
多しハ此齋殿を然云し事如何あり可し万葉一  
荒妙乃藤原我宇倍尔食国辛賣之賜年登都官者高所  
知武等ニよ由縁由金真弓乃崗尔官柱太布座御在香  
辛高知座而る俗カ常往不  
断の住處と云意あり謂あり 借右の文よ合せて考ら  
し屋棟の両方より草葺を葺上りたる其留りの合目

ハ草葺の入組て一よ成る所よし有けしハ苜草イラカ葺ふ  
るむか約りて伊良加の言とハ成る者あり可し  
和名抄よし苜を訓イラカと字書よし小草生刺也と有る此意を  
り加夜と加とのと云ハ尾カヒラ草平の義あり是あり同  
抄屋宅具よし薨釋名云屋背曰薨和名伊良賀言在上覆家宅  
也と見え名義抄よし薨棟と有て伊良加と云訓有ハ説  
文よし薨屋棟也と有る依りきたる者あり桂譽重説よし  
踐祚大嘗祭式大嘗官正殿一字の下よし薨置堅魚木ハ  
救と見えたると思ふ棟の所在を俗よし屋腰ヤノハラとしも  
云ふよし薨ハ實よし屋背ヤノセと云ふ當りて世よし箱棟ハコムネ又ハ上ウヘ



雷音記中  
 又具蛇來查  
 於屋頂板草  
 入又ハ蛇繞屋  
 查一查於屋頂  
 昨草板閣落於  
 女前ふと見え  
 たり

棟之云物是ありこ云ろハ甚細一き説あり有ける  
 谷重遠説ハ覺屋棟覆也と云ろハ可一然ハ其状  
 似魚鱗故有許訓と云ろハ否ろ其ハ後の尾屋ふどの  
 覺ありハこ有ハ高直のハ昔た  
 り一上代ハ何不然ハ状の有じ 右の古事記ハ穿其  
 服屋之頂之有ハ覺一處を存ず一ハ廣く屋棟を云  
 ろ者ろハ記傳八十四 白檜原官殿ハ降此刀狀者  
 穿高倉下之倉頂自其墮入一有て頂ハ共ハ棟あり和  
 名抄居宅具ハ棟謂之椽和名並祢新撰字鏡ハ椽極上  
 横巨者也棟也年祢と有り椽ハ増韻ハ屋脊也之注せ  
 り一と云ハたろハ如一此を年祢と云ハ山ハ嶺と云ハ  
 同トク家の嶺を然云るよて言の意同トろ可一景

行天皇五十一年御紀ハ命武内宿禰為棟梁之臣之見  
 元顯宗天皇御紀室壽御詞ハ取擧棟梁者此家長之御  
 心之林也之有る棟梁の棟ハ唯屋の嶺と云て梁ハ屋  
 腹ハ架す木めて俗ハ棟木と云物是あり大殿祭詞ハ  
 とも柱折梁戸牖 錯此 動鳴事益 之梁と云て棟  
 を云ざろハ棟ハ屋の頂上を廣す云名よころ有け色  
 棟の木を云ろろと云バ此の屋覺も古事記の服屋  
 之頂も同ト所を存すめて其異なき者あり 故和名抄  
 宇都波利棟梁也と云ハ全張めて棟方ハ全ハ張架一  
 て屋の格と成る所の謂ありと誰一も棟ハ別の物  
 の如く取違ろ事あり大殿 ○穿ハ宇賀知氏ハ訓リ  
 祭詞講義ハ云り見合す可一



出雲凡記秋鹿郡  
惠恩堂條下有  
形勢之盛盛所と  
有と形勢と  
此言同

二の義我抄保流  
とも阿那とも登保  
流とも宇賀都とも  
都良又とも加與布  
とも阿那保流とも  
訓たとも今とて  
知べきなる同抄は  
元字とも宇賀都  
と訓と元字とも都久  
又宇賀都又保流と  
見え又字を鏡集す  
穿と宇賀とも有ハ  
然も云一なるけ

即屋覺を鑿山明すと云る古事記に神武天皇御紀に霜山啓行  
乃尋鳥所向仰見而追之遂達于菟田下縣因号其所至  
之處曰菟田穿邑有ハ山を踏み行路を啓きて終小  
国中よ出給へるに因て稱する其下の穿邑此云于  
介知能務羅と有を以て言意を知べし窺ふの字加  
と等しき言と聞えたり穿ハ田機活法よ曲入也と有  
てとバ其も宇賀都と訓あり又穿字を字彙に穿也と注  
とも保流とも通ハ一云言と通ゆめり○投納ハ第一  
一書よ投入殿内も見えて此も同トク穿ニ一書よハ  
納殿内と書々此の投入と等トク訓セたり古語拾遺  
よハ逆剝生駒以投室内と有て投の一字ありとも其同

ト訓あり所る古事記ハ逆剝天斑馬剝而所墮入  
と有ハ彼自持原官殿よ降此刀狀者穿高倉下之倉頂  
自其墮入と有て此の投入と同トク墮入の字を用い  
たり俗よ投入又落入る事よ勢を添てハ投込又落込  
と云程の意味と聞可し此ハ天照太神を驚り一奉  
くして生駒と逆剝よ成し置を給へる任よ投落し  
込て狂り翔り廻るせむと謀給へる者あり次子以  
と有ハ其事の甚く急るるに任せて逃散させ給ふ御  
暇の御在し坐ざりしをめぐり指遣よ穢室と云い室内  
と云る室ハ彼升堂ハ室の室あり甚く奥ありたり  
一所めて有けり急ぎ出させ給い難たり御  
事知○是時天照太神驚動以投傷身を第一一書よハ



稚日女尊乃驚而墮穢以所持按傷體而神退矣こ見え  
 古事記も天衣織女見驚而於按衝墮上而死こ有り  
 死字こ有り誤るけし此二傳上り已にサレたるが如くあり甚正こ有り有ける  
第二言と共と此も天照太神の御自織せ給へる趣も傳へたる  
 りこ有り此云々の事共を天照太神の御上も係たるも  
 甚く事違ひたる事あり不有心き古事記も其衝墮上  
 而死の文も續き之故於是天照太御神見畏而閉夫石  
 屋戸而刺許母理生也と有る此も能通えて有るこ有り  
 此の驚動ハ其天衣織女として始て斎服の事ハ社奉  
 給へりこ有り稚日女尊の御事あり不こ有り驚動を於掃呂

伎傳成と訓じ此言ハ傳十百五十九下も云り○按ハ此と訓  
 べし仁徳天皇二年御紀こ有り出たる喟按皇女を古事記  
 もハ彼多毘能大郎子こ有りと證と爲へし記傳八十五  
 も和名抄織機具こ有り通俗文云竟緯日字和名亦謂之按  
 今按京抄字也說文云杼者機之持緯者也こ有り見え字鏡  
 小杵和名緯織比伊こ有り有りし見えたる按を比こ云ハ楯  
 の言も同じく緯こ有り通ハす由の稱和名者あり又記傳  
 の今本も加比と訓るハ誤るこ有り此ハ御按の意も古本  
 小和比と訓を附たるを和名加の誤るこ有りしと心得て  
 後人の校意も改こ有りしある昔の訓も和名を和と作る  
 書紀も多し心得置べし云とたり然る言あり○傷  
 身和名第一一書も傷體和名と有る同ト古事記も天衣織



女の事と爲るハ正一、傳めて有けとゞル於授衝陰  
 上而死と有ハ甚トキ僻傳あり衝陰上ハ記傳あり云  
 きたらが如く崇神天皇十年御紀ハ倭迹、姫命の著  
 撞陰而薨と有よ似たら事と其傳の彼記ハ益キハ  
 此の天衣織女の事ハ混れ入て其ハ亡ありつら  
 り可一其上天衣織女ハ稚日女等の御車りて拾遺  
 の石窟段天ハ榊姫神と出たら神多とガ此ハ身七  
 給四神出生章つゞる事著一彼身十一一書ある保食神ハ外三去  
 給へらハ在を麻加理の言の同じきく死字誤れ  
 るハ等一々天衣織女も見驚き固章て校を以て身を

傷へる忽ハ罷去つる事傳二十十ハ辨るが如く  
 且ハ身亡たる事ハ努と有べくく傷字ハ同記素  
 菟段ハ我身悉傷と有る傷を曾古那波延都ハ記傳ハ  
 訓五らつら取て傷身と美ハ予曾古那比給布ハ訓ハ  
 きらり中昔の歌の詞書あどハ心り曾古那比氏ハ有  
 一、事ハ思ゆハあり 名義抄ハ伊多牟とも伎夫流と  
 也曾古那布とも伎巨都久とも  
 於煩布とも於母布とも亦久牟とも伎受とも比波流  
 とも麻登布とも袁志牟とも麻禮加とも有る其比波  
 流ハ俗ハ引ると云事ある可一麻禮加  
 加ハ一本ハ麻志加と有とゞ知ず ○以上初ハ御田  
 の事ハ新嘗の事後ハ織殿ハ事ハ其次身古事記  
 と合へる實ハ然有ぬ可キ傳あり合二ハ辨へしと



す第一一書ハ是後種日女尊生于斎服殿而織神之  
御服也素戔鳴尊見之則逆剥班駒投入之殿内種日女  
尊乃驚而墮機以所持梭傷體而神退矣故天照太神謂  
素戔鳴尊曰汝病有黑心不欲與汝相見乃入于天石窟  
而閉著磐戸焉之有て天照太神ハ此生剥逆剥の事ハ  
依て天石窟ハ入て御在し坐す状の傳りて此正書  
ハ合る物なり營田之新嘗との二事と漏せらハ正  
書の状ハ異なり<sup>ガ</sup>寫メ委任て省<sup>ル</sup>たり者ハ  
所見たり其上斎服殿の御事ハ至りてハ正書ハ天  
照太神の御自織せ給へる趣ありを此ハ其ハ異ハ

一て種日女尊の御事と爲る故ハ事の状を記も是く  
カを入れて物爲る<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>神衣の傳を此を以て正  
一と爲べく<sup>カ</sup>古事記時此ハ次ハ舊事紀ハ織女  
種日女尊と有ハ其二を合せて此文を成せらる可け  
<sup>カ</sup>ハ非ず但石ハ神退矣の文有ハ四神出  
生章第三一書ハ伊弉冉尊の御  
事ハ云々神退矣亦云々神退矣と類めて其所ハ居止  
て給ひ難く<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>外ハ身退き坐る御事なり事  
申すも更あり然る<sup>カ</sup>古事記ハ天衣織女見驚而於梭  
衝種陰上而死之作<sup>カ</sup>死<sup>カ</sup>字ハ誤あり事上ハ云るか如  
次ハ第一一書ハ日神尊以天垣田爲御田時素戔鳴  
尊春則填渠鼓畔又秋穀已成則胃以<sup>胃</sup>俗繩且日神居織  
殿時則出剥班駒約<sup>納</sup>其殿内凡此諸事盡是是状雖然日



神恩親之意不愠不恨皆以平心容焉及至日神當新嘗之時素衣出每則於新宮御席之下陰自送奠日神不知徑坐席上由是日神舉體不平改志恨迺居千天石窟閉其磐戸之有て此より先より御田の事有て正書古事記より同く中より織敷の御事有て後より新嘗の御改めて此前後より同く等しくけり其中より日神居織敷云々の事より日神の御自織とせ給ふもの状も聞ゆり正書と共に誤りありて第一書の傳は如ざるあり若て此の天羅の中より生剥逆剥の殊より重き最條なるか故より日神も平和の御在り坐す方なく

石窟より入坐るより有りて右より平心容焉と云ひ次より尿戸の事は依て隱坐る状より傳へたるも古事記より故雖然為天照太御神者登賀米受而告如尿醉而吐散登賀我那勢之命為如此云々と詔直させ給へる其より妙なる由共有て殊更より上六下は云る如くあるは此の織敷と新嘗との前後の相違より甚しき誤りあり一有けり然る有ては新嘗の御時の委より細くある事は何れも傳へたるも此一書より遙より勝りけり但大後詞より天津罪止畔放溝垣通放頻時串刺生剥逆剥尿戸と次で尿戸の生剥逆剥の後より在りと雖も彼の諸の天羅の限を集めて一云るあり有りて其次算る也



小抱ハる可き事ハ古事記高志比官段ハ生剝逆  
剝河離溝理屎戸と續けて最前ハ在つ御田の事  
リも始ハ置次ハ分三一書ハ是後日神之田有三處  
た者ヲヤ  
焉號曰天安曰天平曰天邑并曰此皆良田雖經霖旱無  
所損傷其素多鳴尊之田亦有<sup>三</sup>處號曰天楨曰天川依  
田天口鏡田此皆磽地雨則流之旱則焦之故素多鳴尊  
妬害妙田春則廢棄槽及埋溝毀畔又重播種子秋則極  
穡伏馬凡此惡事曾無息時雖<sup>然</sup>日神不愠恒以<sup>于怒</sup>相  
容焉云云至於日神閑居于天石窟也<sup>之有</sup>此ハ唯  
御田の事のみ有て新嘗又織殿の御事とハ省き記  
さざらるると雖も此云云と云みて位ハ譲りて略き

載<sup>し</sup>と<sup>さ</sup>らる事知<sup>ら</sup>る<sup>た</sup>り其類説の有る方ハ未<sup>ら</sup>る<sup>た</sup>り  
右の御田の事と云る終ハ雖<sup>然</sup>日神不愠恒以<sup>于怒</sup>相  
容焉と見えたりハ古事記ハ故雖<sup>然</sup>爲天照太御神者  
登賀未受而告<sup>略</sup>又離田之阿埋溝者地矣河多良新登  
許曾我邪勢之命宮如此登<sup>詔</sup>雖<sup>道</sup>略<sup>中</sup>之云<sup>ハ</sup>當<sup>ら</sup>所  
あ<sup>る</sup>此<sup>其</sup>正書<sup>分</sup>之同<sup>ト</sup>傳<sup>ル</sup>可<sup>キ</sup>也<sup>ハ</sup>其<sup>も</sup>此<sup>次</sup>ハ新  
嘗其次ハ織殿の御事<sup>ハ</sup>有<sup>り</sup>云云<sup>ハ</sup>記<sup>す</sup>と  
つ<sup>ら</sup>者<sup>と</sup>こ<sup>ろ</sup>所<sup>思</sup>え<sup>たり</sup>けれ<sup>ば</sup>但<sup>此</sup>ハ<sup>御</sup>田<sup>の</sup>事<sup>ハ</sup>  
り<sup>ハ</sup>詳<sup>多</sup>る<sup>ハ</sup>過<sup>て</sup>却<sup>り</sup>て<sup>如</sup>何<sup>も</sup>が<sup>や</sup>所<sup>思</sup>ゆ<sup>る</sup>事<sup>共</sup>  
も<sup>少</sup>く<sup>さ</sup>ら<sup>る</sup>も<sup>其</sup>ハ<sup>傳</sup>ニ<sup>十</sup>二<sup>卷</sup>ハ<sup>就</sup>ニ<sup>論</sup>ぶ<sup>可</sup>き  
者<sup>ハ</sup>○<sup>楮</sup>右<sup>件</sup>の<sup>罪</sup>條<sup>ハ</sup>大<sup>後</sup>詞<sup>ハ</sup>謂<sup>ゆ</sup>天津<sup>罪</sup>なる



か此巻首に註るが如く此の天照太神の衣食住の事  
 をしる世に始めさせ給ひて顯見蒼生を治養ひ給ふ  
 事を起し給へる所なり然るに素戔嗚尊は悉く此  
 を妨げ害ひせ給へるに己の四神出生章第十一書  
 に所見たる保食神の御事より因りて軍申すも更なる  
 と雖も其因て起る所を心有べりける故思ふに己  
 の師も云水たろが如く天照太神の御父伊弉諾尊は  
 屬奉るを給ひ素戔嗚尊の御母伊弉冉尊は屬奉るを  
 給ひける事申すも更なる御事なり儲傳千二百三  
 る如く風神火神の伊弉諾尊は屬奉る神なりが天照

太神より從奉り金神水神土神の伊弉冉尊は屬奉る神  
 多し素戔嗚尊の治給ふ神は御在り坐るなり風  
 神の御事ハ四神出生章日神の御生坐る所は故以て天  
 柱擧於天上也と見え火神ハ其第六一書に其殺さる  
 給へる御散るも血あり神の成坐て直り天上より昇坐  
 る是あり又金永土の三神の素戔嗚尊は由り較略  
 ハ宝劍出現章第五一書小鞆御之島是有金銀若使吾  
 兒所御之國不有浮寶者未是佳也と云ふ御政見え又  
 出雲風土記に八束水神と有る彼滄海原潮之八百重  
 と治す御名あり由傳十五百十五十一丁ト己に註



一又傳八ハハ十三百五五云々ハ如く其荒魂ハ海神  
豐玉彦命ハ渡ル給ヘと古事記ハ所見たる其神  
の御言ハ吾掌水ニ云語有リ又万葉十三ハ月夜見  
乃持有越水ニ云事ハ有ハ更ハあり海水の潮汐も空か  
る月の出沒ハ従ルあハ是金神土神の従奉ル所以ハ  
り次ハ右の滄海原潮之八百重ハ御祖二柱神ハ事依  
さハ奉給ヘらハ滄海より係レて国土の全クを所知ル者ニ  
とリ又古事記ハ所見たる其大神の御孫ハ大土神  
亦名土之御祖神の御在ハ坐ハ更ハあり垂仁天皇二十  
五年御紀ハ被載タる大倭大神の御言ハ我親治大地

官ハど所見たるを以て土神ハ素戔鳴尊の所屬ハ渡  
る給ル御事ハを曉ス可クありハ斯ハ大神ハ伊弉諾大神天  
神火神ハ御在ハ坐ハ伊弉冉大神素戔鳴尊ハ二柱ハ所屬  
て金神水神土神ハ御在ハ坐ハなりハ有ハけるハ然ル也ハ其  
其風火金水土ハの五神共ハ正身ハ天工ハ御在ハ坐ハる  
事傳十五卷四十八丁ハなりハ此ハ唯其所屬の田縁ハ  
云々ハ皆四神出生章ハ第一書ハ伊弉冉尊生火産靈時  
寫子所焦ハ而神退矣亦云神邊矣其且神邊之時則生水  
神罔象女及土神埴山姫又生天吉葛ハ之見えたる其ハ  
鎮火祭詞ハの神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妹二柱嫁継  
給ル國能八十国島能八十島ハ生給ル此ハ八百万神等ハ  
生給ル比麻奈奈子ハ火結神生給ル比美保止被燒ル石隱



坐氏夜七夜晝七日吾字奈見給比吾奈扶乃命止申給  
此比七日尔不足氏隱坐事奇止見所行須時火字生給  
氏御保止字所燒坐支如是時尔吾名妹乃命能吾字見  
給布奈止申字吾字見阿波多志給比津止申給氏吾名妹  
能命波上津国字所知食信吾波下津国字所知字申氏  
石隱給氏與美津救叔尔至坐氏所思食久吾名妹命能  
所知食上津国尔心惡子字生置氏来尔宣氏返坐氏更  
生子水神匏川菜植山姬四植物字生給氏比能心惡子  
乃心荒比曾水神匏填山姬川菜字持氏鎮奉禮正事教悟  
給支之有尔文字當尔所尔然尔其水土二神の成

坐乃事ハ四神出生章第四一書字伊時丹尊且生火神  
軀遇突智之時 悶熱慎憚因為吐此化為神名曰金山  
彦次小便化為神名曰罔象女次大便化為神名曰植山  
媛有水神ハ小便止土神ハ大便止因て成支也  
給へり一者有古事記也然リ於尿成神名波延夜  
神之所見たり其前後の違こり有け也故其傳之共  
御尿之御尿字因て成坐る傳ハ異るず  
ハ鎮火祭詞ハ伊時丹尊の大神を指て心惡子之宣給  
へるが如く實ハ然所思一坐ハ故ハ其火神を鎮給ハ  
しハ為ハ御子を成一坐ハし一と更ハ御尿放ス給  
ハハ水神成坐一御尿を放ス給ハ土神の成坐リ



けるは水神ハ瓊土神ハ川菜を以て其火を鎮奉ると  
車教へ給へり御事あるが其然所思一疑一給へり  
一報復<sup>カキ</sup>一此寶鏡開始章あるに有ける其ハ此見  
天照太神嘗新嘗<sup>ニ</sup>時則<sup>ニ</sup>放<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>新宮と有る其同ト  
車<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>一書<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>素戔嗚尊則於新宮御席之下陰<sup>ニ</sup>  
自送糞日神不知徑坐席上由是日神舉體不平と見え  
たるを神祇本紀も於新宮御席之下<sup>ニ</sup>放尿送糞<sup>ニ</sup>と有  
ハ全く同ト文あると思ふは富昔御紀ハ然る本の有  
つるより採とる者あり事實は符合へる傳説あり  
有ける諸右も云るが如く天照太神もハ火産靈

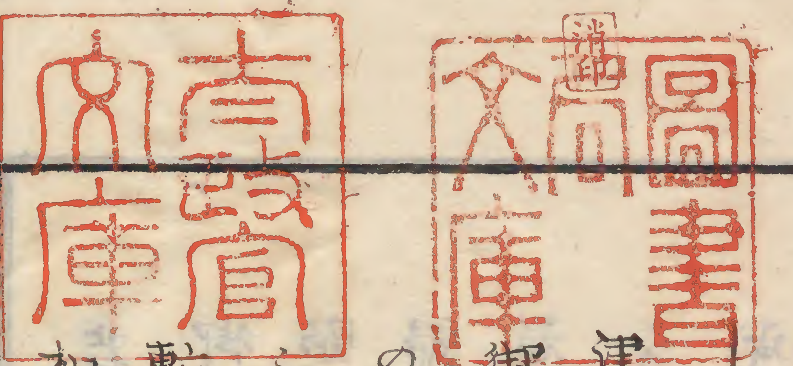
神の殊は親しく属奉るを給ふ御事よて今も眼前に  
瞻奉りても知りたる如く天日の宇宙に放たせ給へ  
る大御光ハ火よ非ずして何と云ふ此は素戔嗚尊  
の放尿送糞の事御在り坐せしむハ御體舉りて不  
平よせ給へる事伊弉册尊の火神を鎮めむ為に放尿  
送糞の御事有るを給へる御報と申さしむ強事  
よハ且て非ら可一物ハ素戔嗚尊の物ハ御心御在  
自然ハ火神の御徳の歸れる日太神の大御稜威を折  
トき奉るよ至るも言一物ハ御事あり後ハ  
人を誑ふも此事を成して驗有るかと皆共御靈  
を天神よ得て成り者あるか故る世よ不浄を忌  
避る事の起り火忌の事ハ若て此は其云々の事の有  
基あるに在る事あり



つゝ為よ由此發愠乃入于天石窟閉鑿戸而幽居焉と  
所見たりハ右の詞は火結神生給氏美保止被燒氏石  
隱坐氏有る事の友反少て火神の御為よ伊弉册尊の  
石隱給へりハ此度も大神を率給へり天照太神  
もて坐してハ伊弉册尊は屬奉りて給へり素戔鳴  
尊の御為よ然る御事は及ばせ給ふ運びは自然至  
り者ありけり若て此日神を招奉るこゝて其場は  
神集り集つせ給へり神の中は其主ハ一き神等ハ何  
以も火産靈神の御族の神は坐るが其御祈り感けて  
天照太神の出させ給へりハ又其反さいるる所あり

若て其事の極ハ終ハ伊弉諾大神の御徳の進ませ  
御在り坐して伊弉册大神は遠く勝るを給へり驗の所  
顯ハ日こそ給へりあり有ける諸此後ハ然後諸神  
歸罪過於素戔鳴尊而科之ハ千座置戸遂促徴矣と見  
えたりハ素戔鳴尊の身滌解除あり事本ずりの御事  
あり然れども其事の極ハ伊弉册大神あり禊祓を  
成て先ハ伊弉諾大神の筑紫日向めて禊祓ひ為させ  
給へりハ對あり四神出生章第六一書ハ見えたりハ  
如く己ハ絶誓之誓言の御事の御在り坐て異處に離り  
せ御在り坐つても此国土ハ御在り坐る御靈ハ





何處より伊特諾伊特丹二柱御祖神共よ並じ鎮り御  
在し坐す所以此よ在る御事あり若て此の末よ己而  
竟<sup>逐</sup>運降焉と見えたるハ謂ゆる根国よ神逐い給へり

事よハ有るも其も亦右の詞よ吾名妹<sup>能</sup>命<sup>波</sup>上  
津国<sup>年</sup>所知<sup>年</sup>と申給へり

御事の御在し坐すと其反よ成る所あり凡て黄泉国  
の件よ此<sup>天</sup>右窟の云くとハ各よ互に相<sup>あ</sup>互<sup>あ</sup>りて相合

ふ奇異よ靈<sup>あ</sup>け<sup>き</sup>理の御在し坐る事共よ此章の  
較略りも伊特諾伊特丹二柱御祖神の御上よ皆悉く  
相系列ふ御事ありと前後始終を考全せて深く遠く



